

鬼怒沼へ—親子ジカの問いかけの旅

——野生動物と人間は本当に共生できるのか——

姜 兆文（ワイルドライフマネジメント事業部 関東支社）

■ はじめに

1990年代以降、日本各地でニホンジカ（以下シカ）の個体数が急増し、農林業への被害や生態系の攪乱が深刻な問題とされている。これを受けて、政府はさまざまな対策を講じてきた。平成19年には「鳥獣被害防止特措法」が制定され、被害対策が本格化。平成26年には「鳥獣保護管理法」が改正され、狩猟や捕獲に関する規制が緩和された。さらに平成27年には、「認定鳥獣捕獲等事業者制度」が創設され、捕獲の効率化と計画的な管理が進められている。

だが、これらの制度が導入された今も、成功例は少ない。被害の根本的な解決には至っておらず、「数を減らす」ことばかりが目的とされ、かえって現場に混乱と疲弊をもたらしている面もある。このような人間中心の議論が続く一方で、忘れられがちな視点がある。それは、「管理される側」であるシカたちからの視点だ。

本稿では、鬼怒沼を目指して旅する親子ジカを通して、彼らの目に映る荒れた森や痩せた土、そして「管理」という名の境界線について綴っている。生きることそのものが「罪」とされるようなこの世界で、野生動物と人間は、本当に共に生きていけるのか。自然からの静かな問いかけが、今、私たちに突きつけられる。

過剰とされる存在が、何を食べ、どのように人間社会と関わってきて、今それがどう変化せざるを得なくなっているのか。被害者か加害者かではなく、地球に生きる者同士として、私たちは何かを見落としているのではないのか…。それを考えるための一つの試みである。

■ 鬼怒沼を目指す

朝露の残る森の小道に、小さな足音がふたつ。私と、まだ幼い子ジカだ（写真1）。初夏の風が心地よい朝、標高の低い谷から、私たちは高地の湿原・鬼怒沼を目指して歩いている。食べ物を求めるこの移動は、私たちにとって季節の恒例の営み。でも、子ジカにとっては初めての長い旅。



写真1. 鬼怒沼へ移動する親子ジカ

植生のない岩だらけの道で、何度も立ち止まっては「もう歩きたくない」とつぶやく。

「大丈夫。上に行けば、ササなど植物の新芽がたくさんあるよ。」

このあたりの森には、もう食べられる草がほとんど残っていない（写真2）。ササは枯れ、若芽も少ない。かつては豊かだった低地の森が、今は静かに命を失いつつある。生きるために食べる、それだけのことなのに、「増えすぎた」、「森を壊した」と言われる。

それは、私たちだけのせいなのだろうか？



写真2. 低標高地域の食物が乏しい森

「山の上には本当に美味しいものがあるの？」
 「鬼怒沼には、まだ緑がいっぱい残っている。
 新芽は柔らかくて、お腹も心も満たされるよ。」
 子ジカはうなずきながらも、急な坂に足を取られ、息を切らしている。

■ 緑の“空白地帯”

やがて、子ジカが足を止めた。緑の林が広がっているのに、地面はむき出しの茶色い土(写真3)。
 「緑の森なのに、どうして何も食べられるものがないの？」
 「ここはね、人間がヒノキやスギばかりを植えた場所。私たちが食べられる草や低木は育たないの。見た目だけが緑の“空白地帯”になったのよ。」



写真3. 下層植生がほとんどないスギ植林

人間が山を開き、同じ木ばかりをびっしりと植えた結果、森は見た目だけの“森”になった。光が差し込まず、土は硬く痩せ、草が育たない。春のうちに食べ物は尽き、私たちは高地へ移動せざるを得なくなる。

「昔は違ったの？」

「そう。色々な草があって、季節ごとに味も香りも違った。でも、人間は木を育てて売ることばかり考えて、森の命の循環を忘れてしまったの。」

■ 土砂崩れは、誰のせい？

途中、大きく土砂が崩れた場所があった(写真4)。

「山が壊れているの？」

「草や根がないと、雨で土が流れるの。昔は植物の根が土を守ってくれていたのよ。」



写真4. 土砂崩れした斜面

「これも、私たちのせい？」と子ジカが聞く。
 確かに人間は「シカが草を食べすぎて山が崩れる」と言う。でも、本当に私たちだけのせい？
 そもそも、多様な植物が育たないような植林をして、地面の保水力を奪ったのは人間だ。食べ物がなくなって、安全に生活できる森が減ったから、私たちも奥地に来るしかなかったのだ。

■ 登山道と踏み荒らされた自然

登山道に差し掛かった。そこはもう道というより、むき出しの地面（写真5）。掘られた溝に石が飛び出し、植物もない。



写真5. 踏み荒らされた登山道

「どうしてここ、こんなに荒れているの？」

「昔は草が覆っていた。でも人間が繰り返し歩いて、植物が育たなくなったのよ。」

自然を楽しむために山に登るだけで、ルートを整備せずに放置すれば、やがて自然は壊れる。山を濫用しただけだ。

踏み荒らされた登山道沿いに掲げられた「ゴミは持ち帰りましょう」の看板が目に入った（写真6）。きっと、昔は持って帰らない人が多かったからこのような看板が立っているのだろう。人間の身勝手さを感じる。



写真6. ゴミ持ち帰りを促す看板

「どうして人間は山を大切にしないの？」

「たぶん、自分たちのものだと思っている。でも、本当は誰のものでもない。私たちも虫も鳥も、共に生きているのに。」

■ 食べるという“罪”

道中、私たちが樹皮をかじった跡がある木を見つけた（写真7）。



写真7. シカの樹皮はぎ

「これ、私たちがやったの。冬に食べ物がなくて、仕方なく木の皮を食べるの。」

「おいしくないよね。」

「うん。でも、他に何も無いときは仕方がないのよ。」

生きるためにしたことが“害”とされるのは、あまりにも切ない。

■ 新芽に会う喜び

標高が上がり、ササの新芽が広がる場所にたどり着いた（写真8）。

「わあ！」子ジカが跳ねて喜ぶ。

私はそっと笑った。生きることは、ただそれだけで美しい。

「お母さん、来年も一緒に来ようね。」 私はうなずいた。

でも、来年もこの場所に新芽があるかはわからない。それでも、この一瞬の喜びのために生きていく。



写真8. ササなどの新芽が広がる山

■ 鬼怒沼湿原の傷

湿原に着いた。風が通り、広がる植物…、しかし、異変がある。踏み荒らされた跡と、ディアライン(写真9)。私たちの口の届く高さまで葉が消えている。



写真9. シカの踏み荒らしと葉がないディアライン

「これも、食べすぎだって言われるの？」
確かに、そうかもしれない。でも、それしか残っていなかったから食べたのだ。

私たちが増えるほど植物は減り、自然は傷つく。けれど、植物が減ったのは人間のせいでもある。

食べられないコバイケイソウばかりが残る湿原(写真10)を見ると、食べ物がなくなった証そのものだ。このままだと、私たちが生きていける場所がますます減っていく。



写真10. コバイケイソウが多い湿原

■ 柵という“分断”

湿原には新しく設置された植生保護柵（写真 11）も発見。中には植物が豊かに生えはじめていた。



写真 11. シカの採食を防ぐ植生保護柵

「ここには入れないの？」

「人間が植物を守るために囲ったのだろうね。」

でも、柵の外にいる私たちには、残っているものが少ない。守ることは、線を引くこと。その線の内と外で、自然がまるで違う世界になる。人間の保全とは、排除を前提とした行為なのかもしれない。

■ 命を“管理”するという現実

「ねえ、お母さん、人間は私たちが嫌いななの？」

答えに詰まりながら、私は言った。

「低地では、銃の音がする日がある。誰かが帰ってこない日がある。それを“管理”って呼んでいるの。」

「上の方は安全？」

「安全とはいえない。高地には足くくりわながある。違和感のある地面に注意して、知らないものがあつたらすぐ逃げなさい。」子ジカは神妙な顔でうなずいた。

「お母さん、人間ってこわいね。どうして……そんなに怖いことをするの？」

「うん。人間は、増えたら“駆除”、減ったら“保護”って都合よく言う。森をいじり、オオカミを絶

やし、自然を変えておいて、今は私たちに責任を押しつけているのよ。」

「でも、怖がるだけじゃなくて、知っておくことが大事だ。どういう存在なのか、どう付き合うべきかを。」

私たちはただ、食べ、歩き、子を育てている。それだけなのに、どうして理解されないのだろう。もしそれが罪だというなら、街や工場、観光地を作ったこともすべて同じ罪ではないのか？

「この森と下の平野部はね、もともと私たち先祖代々の住処だったのよ。人間はあとから来て、自分たちのルールを押しつけてきた。増えたら駆除、減ったら保護。都合のいいときだけ“共生”という言葉を使うけれど、それは支配だと思う。」

これから、私たちを管理するだけでなく、共に生きる方法を、本気で考えてほしい。

そう願いながら、親子ジカは静かに湿原を歩き出した。

■ あとがき

「動物の反乱」という言葉を耳にすることがある。だが、その言葉は本質を見誤っているのではないだろうか。動物たちは攻撃してきたわけではない。ただ、生きるために、かつての居場所へ戻ってきただけだ。ゆえに、「動物による騒動」や「動物による抵抗」などと言い換えるほうが、実態に即しているのではないか。なぜなら、そこには人間と野生動物との相互の問題があるからだ。

シカをはじめとする野生動物と人間との衝突が増えている。だが、その原因の多くは、人間の都合による環境の変化だ。森を切り開き、山を削り、道路を通し、里山の循環を壊してきたのは人間である。にもかかわらず、野生動物の行動だけが問題視され、捕獲や排除の対象となっている。変わるべきは、むしろ人間ではないだろうか。

人間もまた自然の一部のはずだった。だがいつの間にか、自然を「支配できるもの」とし、都合が悪くなれば「管理」の名のもとに他の生き物を

排除する存在になってしまった。「増えすぎたシカをどう減らすか」が語られる一方で、「なぜここまで増えることになったのか」を深く掘り下げようとする視点は少ない。こうした出来事を、あたかも自然界が牙を剥いたかのように捉えることに、私は違和感を覚える。その背後には、人間の中に無意識に根づく傲慢と偏見があるのではないか。

日本では、「鳥獣被害防止特措法」や「鳥獣保護管理法」などの制度により、捕獲体制が強化されてきた。しかし、科学的調査と称しながら、実際には地域の実情や生態系の複雑さを軽視した“数合わせ”が先行している例も多い。自然界のバランスを本当に理解しているのか、自問する必要がある。

確かに、シカの個体数が増えれば、植物への影響は大きくなる。その意味では状況に応じた個体数管理は必要かもしれない。だが、その判断は「人間にとって不都合だから」ではなく、「生態系全体の健全さ」を軸に考えなければならない。自然を一方的に線引きし、保全と排除を切り分ける方法では、根本的な問題解決にはつながらない。

気候変動、集中豪雨、干ばつ、土砂災害といった極端な自然現象が日常になりつつある今、人間

もまた問われている。これは“自然の反乱”ではない。“自然からの問いかけ”なのだ。このまま同じやり方を続けて、生き残れると思うか。

「生物多様性の保全」を声高に叫びながら、一方で自然に進出し破壊をし続ける人間の姿は、まるで矛盾そのものだ。シカとの関係も同じだ。被害が出ているから排除する、という短絡的な考えから一步進んで、どうすれば共に生きていけるのかを模索すること。それが“管理”ではなく“共生”へと向かう第一歩だろう。

自然は人間だけのものではない。すべての生き物と共有する空間だ。その前提を忘れずに、「人間中心」の考えを問い直し、小さくてもできることから見直していく。時間はかかるかもしれない。けれど、そこからしか、持続可能な未来は始まらないはずだ。

歴史を振り返れば、多くの古代文明が自然破壊をきっかけに衰退してきた。私たち現代人も、“進化の名のもとに”同じ過ちを繰り返していないか。果たしてこの現実、何の疑問も持たずにいられるだろうか。この現状を直視しなければ、人類に未来はないのではないだろうか。



表紙の絵

『カワウとゼニガタアザラシ』

どちらも水圏の頂点捕食者であり

どちらも漁業者との軋轢がある動物です。

水産資源が豊富な我が国ですが近年漁獲量は減ってきている中で

彼らと人間との関係の着地点を見つめることは

野生動物の管理をしていく上で大切なことだと感じます。

p.s. 表紙絵のために数年ぶりに絵を描きましたがとても楽しい…！

今後も機会を見つけて表紙を描けたらいいなと思いました。

羽根田 貴行（ワイルドライフマネジメント事業部 関東支社）